

するようにながける必要がある。

(お茶の水大附属小学校長)

## 小学校入学時の 知能テストの扱い方

小 口 忠 彦

1

小学校入学を人生の門出とみなす傾こうは、最近になって、かなり訂正されてきました。それだけ、幼児教育の重要性がみとめられてきたことになるわけですから、至極けっこうなこと、これからもおしすすめなければならぬのはいうまでもありませんが、勢あまって、フロイドのように幼児期に必要以上の重みをかけることはさげなければいけません。また、小学校入学という出来事に軽はずみの態度でのぞむとしたら、特に日本という社会では一言なかるべからずということになるでしょう。

どこかでこんな会話を耳にしたことはありませんか。

「こんど、おとなりの坊やは、附属小学校にお入りになったんですって。」とか、「うちではやっぱり附属に入れることにしたよ。」とか。

附属小学校へ入ったときには、附属幼稚園や附属中学校、さらに大学などへ入ったときよりも、一般の人々が関心をもってみつめていようです。こういう現象があらわれるのは、一つには、義務制という改まった組織のなかに、はじめて子どもを入れることだからではないでしょうか。

また、こういうことも原因しているかとおもいます。苦勞して育てた子どもが幼稚園にいかれるようになって、「や」と大きくなると「とおもう間もなく、こんどは小学校への入学です。親の苦勞も並大抵ではありません。そのために、小学校へ入学すると、「や」とこれで学校へ入った」という気持になるのではないのでしょうか。

これは、子どもを幼稚園から小学校へ入れた親の場合にも、また、直接小学校へ入れた親の場合にも共通の現象です。

また、子どもにとっても、小学校へ入学することは大変です。幼稚園を経て小学校へ入った子どもは、直接に小学校へ入った子どもよりも集団生活になれているわけですが、どちらもそれまでとはいちじるしくことなつた集団のなかでいろいろな規則に従わなければなりません。一方、教科の面では、算数・国語などをいやでも勉強しなければなりません。また、家庭では、「もう学校へ入っ

ただだからしつかりしてちょうだい。」とか「一年生のくせに泣いたりして。」などと言われます。このため、子どもたちは、あたらしい圧力のなかで生活するようになるわけです。

そこで小学校入学は人生の門出というのはあたらないとしても、一つの関所であるといってもいいすぎではありません。

こうしてみると、小学校入学は、入学時のテストなどがないとしても、本人やまわりの人たちに、かなり細く神経をつかわせるのですから、入学時に知能テストをおこなう場あい、よくよく注意をはらう必要があります。

## 2

あちこちの小学校が入学時におこなっている知能テストの問題をみますと、標準化された知能テストにじゅんきょしてつくられています。

そこで、特につぎの点に注意してほしいとおもいます。標準化された知能テストで一応信頼性ありと認められるものでも、素質としての知能を十分に検査することはかなり困らなで、経験のえいきょうが入りこんでしまうことはさげられません。まして、入学時の知能テストは、標準化された知能テストにじゅんきょしながら多少とも手を加えてつくられるのがふつうですから、子どもがそれ迄にどんな経験をしてきたかによって、テストの結果は多少ともちがってくるのだということを知っていなければなりません。

問題の形式は、大別すると二つにすることができます。一つは、鳩の左の翼のない絵を見せて、「この絵のなかにはどこかたりないところがあります。どこがたりないか教えて下さい。」、菱形の図を見せて、「これと同じものをかいて下さい。」などのように、抽象的に考える力を使ってやる形式になっているテストです。もう一つは、「ここに本があります。この本をあの本の上において、それからその上の窓をしめて、それからその横にある椅子の上の本を私の処まで持ってきて下さい。」のように、具体的な場面でやらせる形式になっているテストです。この場あい、どちらの形式がむずかしいかやさしいかは決っていません。抽象的なことがやりにくいということはいえませんが、いつもそうだと決っているわけではありません。

## 3

それでは、どんな目的で知能テストをやるのでしょうか。

(1) 入学後の指導のための材料にする。

入学する子どもたちの発達のぐあいについての資料がないと、個人差にそくした指導がおこなわれがなくなるのはいうまでもありません。

(2) 学級編成のための材料にする。

学級編成には、能力別学級にするばあいと、バランスのとれた学級(同一学年のどの学級にも、同じように、できる子どもとできな

い子どもとがいるような学級編成のこと)にするばあいとがあることとはいうまでもないことです。どちらの編成がよいかわるいかという点についてはここではふれませんが、とにかく、どのように編成する場あいにも、テストの結果を参考にしなければどうにももうまくいかないわけです。

つぎに、テストをとりあつかう時の一般的な注意についてまともてみます。

(1) 教師や親は知能テストの結果から、「できた」とか「できなかった」という決定的判断をくださないようにすること。

ベネディクトは、「菊と刀」という本に、日本人はとも世間ていを気にする人たちだ、ということをかいています。「できた」とか「できなかった」という観念の底に、こうした世間ていという気がひそんでいるよにおもわれます。手近かなところから、こうした観念をとりさるようになりたいものです。と同時に、入学したあとあとまでも、入学時のテストの成績によつて色づけされた子どもの姿を眺めるといつた危険におちいらぬようにすることは、きわめて大せつなことです。

(2) 入学時におこなう知能テストの結果をこうした方向へもつていかないで、もしできなかった時には、どうしてできなかったのというように原因を探っていく余裕がほしい。そして、もし非常に成績がわるくて手におえない子どもがいた場あいには十分な検討をした上で、特殊学級へ入れるとか、もし学級にその設備がなければ

特殊施設に入れるように工夫してみるとかいうことが必要です。こういう時、教師は、親が悲観しないように注意を与えます。こうした特別の場あいだけでなく、一段の親や子どもたちにも、入学時の知能テストについて必要以上に恐怖心をもたせたり、場あいによればおもしろい気が持たせないように注意することが必要です。

(3) また、入学時には、満六才の子どもと、入学後まもなく満七才になる子どもとがいっしょにテストをうけます。この一年近い年令差は、テストの成績にえいきょうを及し易いから、テストの結果を評価する時に、この点を考慮していることが大切です。

(4) テストは個別的にやるはずですから、知能の面だけでなく、その子どもの興味や性格やクセなどにも注意をはらっていたいものです。つまりは、個々の子ども達を、全人的に見ていたいわけです。

(5) ふだんは、はつきりものをいう子どもでも、テストをうけるような改つたフインキのなかにいられると、おじけてしまう、十分に頭がはたらかなくなつてしまうようなことがあるものです。教師は、テストをうけている子どもの態度を観察し、そうした点を考慮した評価をしていくことが大切だとおもいます。

(6) 教師は、入学時や、入学後にテストをおこなう学校は近代的だ、とおもいこんでいる親がいることを知っていないとまずいでしよう。そうして、親のこういう考えを少しずつでもとりさつていくよう啓蒙しなければなりませんし、また教師自身も、こういう考えにおちいらぬようにつとめるべきです。

さて、教師は知能テストの問題をつくる際、どんな点に注意しなければならぬでしょうか。

(1) 標準化された知能テストの結果から、子どもが入学前に知っているのがふつうとおもわれることを理解していなければなりません。たとえば、つぎのようなことがらです。

#### 円の大・小の比較

問題―大・小二個の円を左右に並べてかいてある図をみせて、「どちらのまるが大きいでしょう。大きい方を指でさしてごらん。」ときく。つぎにこの図を廻転し、左右の位置を反対にして同じようにたずねる。

二回とも正しく指した時、この種類の問題にする対能力は三才なみです。

#### 模写

問題―垂直線・正方形・菱形の図をみせて、「これと同じものを、紙の上にかいてごらんさい。」ときく。

垂直線・正方形は四才で、菱形は六才でできるのがふつうです。

#### 数観念

問題―十三個のオハジキを横に並べ、「指をあてながら声をだして数えて下さい。」ときく。

五才すぎれば十三迄数えられるのがふつうです。

#### 理解力

問題―(1)「もし、あなたがどうしてもいるものを買いに行つて、お金が足りなかつたらあなたはどうしますか。」ときく。

(2)「ある人が家に帰つてみたら、ドロボウが入つて物をぬすまれていました。その人はどうしてでしょうか。」ときく。

六才ならば、正しく答えられます。

(3) 問題をつくる際にも年齢差を考慮しなければなりません。七才にちかい子どもにとつてもかなりむずかしいとおもわれる問題を六才の子どに与えて、同程度の成績を予期するのは、無理というものでしょう。

(4) 入学時の子どもは、記号やことばを使えるようになっていますが、それでも概念的に考える力はまだ不十分ですから、なるべく具体的なもののたすけをかりて考えられる問題をつくることです。

(5) できるだけ、子どもがおもしろがつてやる問題をつくりたい。というのは、人間の考える力は、一生懸命にやる程、はたらくことになりやすし、いやいやながらやる場合いには、にぶつてしまつて、一生懸命にやればできるような問題でも、できなくなつてしまふことがあります。

(6) 問題をつくる時は、このテストによってなにをしらべようとしているのか、この目的のためにはどんな問題でなければならぬか、また、この問題ならばたしかによいか、という点についてできるだけ自覚していることが必要です。たとえば、**8頁に続く**

校風のこととなった学校を考えもなく受験させる場合がずいぶん多い。親にとつては特殊校でありさえすれば、校風はほとんど問題でない。私はそれほどまでに現実には校風が消滅したとは思っていないが、こうした親と相談などで話していると、二等切符なら何行の列車に乗れてもいい。あのごみごみした三等車だけはおことわりだといっているように聴える。

こうした特殊校に入学させておけば、多くの場合ずつと大学まで無試験で行けるといふのも、これを志望させる親の気持であるが、それだからこの子はあまり頭がよくないだから大学へ入る時苦労させるよりも小学校へ入る時苦労させておく方がとなると、将来が思いやられるし、第一その程度の知能では小学校の選抜試験が見込みがないのに、親は大発見をしたように得意でいられると、こどもが痛々しくなる。

## 5

特殊小学校の入学試験の問題は簡単には解決しない。入試に伴ういろいろの弊害はあつても、入試そのものはまず近い将来にはなくならないであろう。そこで幼稚園側に立つものとしては当面の対策として、第一に特殊小学校の教育というものがどのような意味をもつものであるかを父兄によく理解させよう。第二には特殊校の現実の選抜条件をよく考慮して、それに合致した場合だけ志願に同意しよう。第三には試験問題集を練習するような附焼刃的なやり方な

### 淀の川瀬よどの水車

——わらべうた——

淀の川瀬の水車  
どんどと落ちるは滝の水  
ぼちゃぼちゃ落ちるはお茶の水  
子供や子供や臍かくせ  
今に雷鳴つてくる。  
ごろごろごろごろ

(東京)

く、こどもの生活経験に即した保育をして、こどもの心身の発達を助けよう。こどもが健全に発達すれば当面する問題は無理がなく解答できるものである。ここに小学校側に希望することは、試験にはこどもの身についた能力を調べるようなやり方を大いに研究していただきたいことである。

(愛育研究所員・東京文化幼稚園副園長)

18頁より続く　カタチを全体的にみることができるか、注意力が持続するか、などの点をしらべるために菱型の図を模写させるわけですが、この問題ならば、かなりまでその目的がみたされる、という自覚をもつていふことは大切だといふわけです。

(お茶の水女子大学教授)